

天は世界を包んでゐた

平原渺茫として數千里。思ひは雲を追つて窮りなかつた。

汪洋貫き流れる黄河の水よ。天は映つて影が無かつた。

漢族は遠く古く此處に屯して、已に燦然たる文化をなした。窃窺たる

淑女はこの道を遊んだ。參差たる荇菜をこの岸にもとめた。黄鳥は

ここに飛び、灌木はここに茂り、振振たる公子はあの山に登り、招招

たる舟子はあの岸へ渡つた。

その黄土は禪讓され、皇帝はその姓を易へた。篡奪の遁辭は習ひとなつた。堯舜すでにその統を斷ち、文王も武王も化を失つた。春秋の諸侯は覇を争つて、烏は雌雄を別たなかつた。

雉は鷓として鳴きつづけた。暴逆に酬ひるものは干戈であつた。威權に執するところに争ひがつづいた。鏜鏜轟き渡るのは軍鼓であつた。簇簇群り起るのは百家であつた。名を求め功を望んで諸子はつづいた。習習としてただ谷風が吹いた。仁を爲すものはただ身を捨てた。

それでも私は聞いてゐる。天地の正氣は萬古に存し、國亂れる時は

忠魂に宿り、世傾けば聖人を送ると。孔夫子よ。あなたがあらはれたのは天命であらう。事の成敗をあなたは問はず、一氣の磅礴を正義に存し、凜冽、あなたは闘つて行つた。噓噓として天は曇つた。雷鳴は虺虺として轟きつづけた。あなたは老軀をなげうつて、天下四方を遊説した。慨然として警鐘を打ち、奮然として大義を唱へた。狂瀾は寄せては返らなかつた。教化の凌夷も風俗の頽廢も、黄土に深く滲みてゐた。燕婉は空しく翻つて行つた。あなたは老脚蹉跎として、寂しく魯の國へかへつて行つた。

それでもあなたは信じてゐた。萬世を貫く一天の意志を。失脚はかへつて成功となつた。富貴は陌上の塵となつた。蕩蕩たるものをただ

天に觀た。遙遙たるものを只徳に知つた。あなたの玄鬢は衰へたけれど、あなたは天命に安んじ教育を重んじ、從容としてその道を守り、一貫の至誠を捧げて行つた。天を怨まず人を尤めず、下學上達を努めて行つた。博文約禮皆仁に歸り、諄諄教へて倦まなかつた。山には苞櫟があり、隰には六駁が生きた。あなたは郷里にその道を守つた。恂恂如としてただ仁に居た。蕭森萬古の天を仰ぎつづけた。

これを仰げば彌彌高く、之を鑽るときは彌彌堅く、瞻れば即ち前に現れ、忽焉として後に現れ、その徳は巍巍乎としてそびえて行つた。煥乎たるものは文章となつた。炳乎たるものは禮樂となつた。修身に發して天下に通じ、その道は、その仁を成して大きくなつた。

あなたは本を務めて文を學んだ。行を先にして學に及んだ。あなたを望めば儼然。あなたに即けば温。三千の門下。七十の高弟。四科十哲はその精となつた。あなたは經書を整へ春秋を著し、その志を萬世に傳へた。温にしてあなたは勵しかつた。威あつてあなたは猛くはなかつた。申申如としてただ和やかに、仁を守つて燕居した。山には喬松がそびへてゐた。隰には遊龍が咲いてゐた。あなたは故郷で老いて行つた。山には扶蘇が茂つてゐた。隰には荷華が開いてゐた。あなたの徳は隠れてゐた。

櫻の花は散つて行つた。哀公十六年、四月の天を、あなたは今はの時に、仰いでゐた。天は堂堂として玄かつた。想ひは悠悠として絶え

なかつた。その天は支那の天であつた。その天は日本の天であつた。その天は世界の天であつた。天は世界を包んでゐた。

橄欖の實

橄欖は深い緑の中に伸びて行つた。眞白の花を飾つて行つた。青の  
その實を結んで行つた。カリロエの泉は輝き流れた。アテナイの空は  
澄んでゐた。橄欖は藜藜として伸びて行つた。白馬は廣野に走り去つ  
た。アテナイの市は榮へて行つた。人は己れを忘れて行つた。橄欖は  
知識を知らなかつた。人は自ら知識をほこつた。橄欖の、無知のその  
智を知らなかつた。

あなたも何も知らなかつた。あなたは知らないことを知つてゐた。  
人間の無知を身に知つた。あなたはいつはることはできなかつた。知  
らないことは知るとは言へなかつた。あなたは青年の戀人となつた。  
あなたは市民の敵となつた。人は眞理の鞭を避けて行つた。眞理を生  
むことを拒んで行つた。自らの無知を知りたくなかつた。かれらは草  
木になることを拒んだ。富貴と榮達の知識を求めた。無知の心を觀た  
くはなかつた。慾を捨て去ることはできなかつた。眞理を説く者はそ  
の敵となつた。ダイモーンの聲を聞かなかつた。彼らは天を見なかつ  
た。彼らは雲を仰がなかつた。美はしの神神は偶像となつた。月夜の  
ニンプは彫刻となつた。ゼウスの力は封ぜられた。アポロンの花輪は  
棄てられた。ヘリオスの輝く眼は消えて行つた。森のエコーは弱つて

行つた。アテナイは健康の力を失つた。ギリシヤは本能を棄て去つた。

君の頭は禿げ、鼻はむくれ、家鴨となりシレーヌスとなつて、笑はれながら、美はしの神神たちの使徒となつた。美はしの神神は知を愛した。そのいと大いなる智を愛して行つた。大いなる智は人間の無知をしつた。橄欖はその無知の智に従つてゐた。無知の智は力によつて護られて行つた。君は切瑛し訓練してその無知を守つた。節制と克己によつてその無知を抱いた。一枚の衣を吹く風に任せて、裸足でアテナイを濶歩した。君は、戦陣に出でて故國を守つた。沙塵の中にアルキビアデスを救つた。落馬したクセノフォンを助け起した。獨りで持場を譲らなかつた。君は迅雷となつて勇を奮ひ、氷雪となつてその節

を持した。ソクラテスよ、君は天成の好男子となつた。危険の迫る時、惡の近づく時に、君は天籟、ダイモーンの聲を聞いた。美はしの神神を護るひびきを。美はしの草木につらなる調べを。

アテナイはその無知を知らなかつた。アテナイは美はしの神神を失つて行つた。空は碧く海は青く、山も亦蒼く、都は眞白く聳えてゐた。アクロポリスの丘の上に、金と象牙の女神は光つた。パンアテナイの行列はざはめきつづいた。ハーブが鳴つた。大鼓がひびいた。クローバーの花はまきちらされた。神神はむなしく偶像となつた。美はしの神神は形となつた。無知の倫理は地に棄てられた。市民らは争つて黨を作つた。ソフィストは競つて知識を賣つた。北には雲が湧いて

きた。マケドニアの劍は輝いてきた。美とロゴスの街は傾き始めた。

君は獨りで立ち上つた。君の言葉は萬雷となつた。一時に虚偽らへ落ちかかつた。君は眞理の産婆となつた。君はロゴスの狩人となつた。君は神神の護りとなつた。君は市民の敵となつた。かれらはもとより巧言を好んだ。かれらはもとより正言を嫌つた。かれらは令辭を求めた。利を求めた。メレトスは君を告訴した。

君は辯駁書を斥け去つた。君は斷乎として法廷に立つた。君は不合理的を粉碎した。君は判官に媚びなかつた。君は憐みを乞はなかつた。君は威嚇に負けなかつた。君はただ無知の眞理をのべた。うるはしの

神神を護つて行つた。三十票の差は有罪を決した。君は敢然その非を辨じた。不合理なるものに届するよりは、美はしの神神を失ふよりは、むしろ一死を君はもとめた。五十票の差は死刑を決した。君は市民に別れ、友に別れ、悠悠として、獄舎に入つた。クリトンはしばしば脱獄をすすめた。君は國法の尊嚴を説いた。美はしく正しい、生命にまさる、一つの聲をその友に告げた。

アテナイの太陽は沈んで行つた。神神の星らが輝いてきた。君の最後の時は來た。ギリシヤの天は暗くなつた。橄欖の葉はゆらめいた。君は妻を慰め、友をなくさめ、美はしの神神たちに感謝した。無知の眞理を觀究めた。君は肉身の死の喜びについて、眞理の中に不滅なる

魂について、語り盡し、傳へ盡し、釋き盡した。君は身を潔めて冥想した。體を正し身を正して、毒盃を捧げた。君はまなざしを舉げて盃を乾した。君は仰臥して死を待った。微かな痙攣を最後に残して、君の肉體は亡くなつた。それでも無知の眞理は死ななかつた。美はしの神神は亡びなかつた。橄欖は高く茂つて、枯れなかつた。

アクロポリスの廢墟の中で、橄欖の花は香つて行つた。無知を知らない人人の中で、橄欖の葉らは輝いて行つた。美はしの神神を今も愛でて、橄欖の實は稔つて行つた。

世界は統一されてゐる

正氣は草木に萃つた

213

南彎わんは紫雲を頂いて走り、北彎わんは白雲を冠かむつて續く。南彎、北彎の會する處に、富士は白く高くそびえてゐた。それはどこから見ても坐つてゐた。はだかのままに、風にきよめられ、雨にあらはれて、不死の形をしめしてゐた。世界をみまもる永遠の女體として。萬人、仰ぎ、踏んで、汚れない、日本の處女として。



急流たちはその愛を海に注ぎ、大洋は愛にあふれて行つた。愛らは日本暖流となつて北東に向ひ、愛らは千鳥寒流となつて南に流れた。北西の夏風はシベリヤに渡つた。東南の冬風は大洋に走つた。内側外側の地震帯は、倒れても復興きあがる氣合となつた。三千萬軒の島周を波が洗つた。太陽はその海から、天てらし、坤てらし、言擧げぬ、明るい、花に匂ふ光りをあげた。日本の太陽は、われらの母となつた。愛らしく、おそろしい、日本の海から、日毎日毎に、若い母は生れてきた。海はまた大きな祖母となつた。

太陽は、櫻に匂ひ、富士に輝き、世界のはてまで、照らし、てらし、一日にして、復若がへつた。天に抱かれ、地を包み、雲の岩戸に

隠れても、復、押しわけて、かきわけて、さんさんときらめいて行つた。沈んでも、しずんでも、死んでも、隠れても、復生き返つた。日本の四季はその太陽の中でうつつて行つた。

日本の初空が明けそゆく。東風が吹く。霞がかかる。東雲の中に氣が上る。それは暈氣。それは香氣。それは鬘氣。それは正氣。それは瑞氣。それは淑氣。

すめらみかみは天地四方を拜し給ひ、門ごとに松が立つ。竹が立つ。梅が香る。萬才は祝ひ、猿らは踊る。雀らはむれないて下り、鳥らは林に向ひ、ゆづり葉のもとに、福壽草は黄金となつた。

日は永くなる。曉の鐘らは重つて迷ひ、霞は霰霰、山の邊にかか  
る。水雲は風によろめく。光風はうづくまる。霜は解けて、陽炎の中  
を鳩が飛ぶ。鳩は海をのぞみ、湖をこえて、春の園生にかへつてき  
た。嫁菜も、蒲公英も摘まれるままに伸びて行つた。瓜はうなつて上  
つて行つた。水鳥たちは囀つた。鶯は山を呼びはじめた。燕は身を翻  
して舞ひ上る。ひばりは空を貫いて行つた。椿らは、白く赤くうなだ  
れた。白樺の芽が出た。藤の芽が出た。柿の芽が出た。楓の芽が出た。  
芽らはみな日本の氣候を知つてゐた。日本の天を知つてゐた。日本の  
文化は知らなかつた。

人らは春の畝を踏んだ。人らは畑をうちかへした。蓮根を掘り百合

根を掘り、桑苗を植ゑた。白魚らは河口にさまよつた。梅は春を告げ  
て香つてきた。人らはその香りをたづねて行つた。梅は汚れを吸つて  
香つて行つた。寒を破つて花咲いて行つた。

春雷は蝶のねむりをゆるがせた。龍らは天に上つて行つた。猫は子  
を産んで眠つてゐた。沈丁花の香りは高くなつてきた。若草の上を家  
鴨は走つた。日本の空は花でみちた。海には蜃氣樓がそびえてきた。  
櫻は一重に八重に咲いた。人らは花を見て歴史を想つた。散つて行く  
花瓣を見て美はしい死をおもつた。もえでる若葉を見て美はしい生を  
おもつた。

夜櫻も朝櫻も敢つてしまつた。桃の華も散つてしまつた。それでも揚梅の花が咲いた。櫟の花が咲いた。篠懸の花が咲いた。海棠の花が咲いた。蝶も蜂もまだ迷つてゐた。藤は波となつてゆれた。山吹は隠れて瀧に映つた。満天星の花は岩を抱いた。通草の花は幹を巻いた。鳥らはその巢に籠つて行つた。草の匂ひが日本に満ちた。青葉は山を衣した。人は疲れと苦しみの息を吐きつづけた。草木は黙つて日本を粧ひ、日本の汚濁を潔めて行つた。

南の風が吹きはじめた。虹は日本の橋となつた。風薫るところに鯉が躍つた。子供らは川を涉つて行つた。青嵐は神社の屋根を清めて行つた。震雷の陣はとどろいた。オゾンに空に満ちて來た。蒼鷺らは水

邊の小蟲をとらへ、水鶏らは曉かけて鳴きつづけた。目高が必死と跳ねてきた。緋鯉が赤く光つてきた。蟬たちは諸聲あげて鳴きはじめた。毛虫も蜈蚣も、草木に寄つて輝いた。蕁菜らは古池の面を装つた。青鳶は、傾く小屋を守つてきた。岩檜葉が泉の水を呑んできた。紅に、白に、絞りに、紫に、花笠たちは咲きそろひ、野茨の香りは牛を追つて來た。鯉たちは西吹く風に吹き流され、燕の子らは出發した。野には梓の花が咲き、苑には牡丹がこぼれてきた。莓らは眞赤な顔を整列した。日本は、色と香りを呼吸した。

五月雨に、黄雀風が吹きそつた。富士山のお花晶が開かれた。紫紺と紅と白妙の、山に朝日が登つてきた。水鳥の子が泳ぎだし、水馬

らが寄つてきた。螢が畝をつたつて行く。柘榴の花が朱に咲いた。榊の花が舞つてきた。若竹は今空を突き、谷間の百合がうなづいた。釣鐘草が揺れて行つた。彼らは爆弾を知らなかつた。彼らは悩みを知らなかつた。彼らは彼らの日本の、陽の暖かさを知つてゐた。

微らは庭にはつてきた。雲の高嶺が群つた。ながしがゆるく吹いてきた。清水は岩から湧いてきた。燈籠たちがともされた。かぶと蟲りは枝をはひ、蓼喰ふ蟲が落ちてきた。蠶螂は鎌をにかけて生れてきた。朝顔は、一輪毎に色をかへた。松葉牡丹が散りしかれた。夏は終りに近づいた。兒らはみな、潮をあびて、みそぎした。

金氣は玄く立つてきた。稻は黄金にみのつてきた。鳴子が遠く音立てた。馬らはだんだん肥えてきた。こほろぎたちが鳴きそめて、葡萄の房が揺れてきた。尾花も萩も風に伏し、撫子たちは待つてゐた。人らは山の月をみた。人らは野邊の露を踏んだ。物思ふ兒の胸は迫つた。働く兒らは歡呼した。白芙蓉らは雪を落し、一葉蘭は香りに寂びた。夜は雁の音に長くなつた。人は詩を創り、歌を詠んだ。鶺鴒は石をたたき、檀鳥を追つた。野菊は紫にゆらぎ、人は松露の香りを踏んで行つた。栗をひろひ紅葉を追つてさまよつて行つた。正氣は日本に集つてきた。神氣は日本に凝つてきた。日本の草木に寄つてきた。氣は日本の秋を愛し、日本の秋は晴れつづいた。五穀は稔り、果實はその色を輝やかした。草木は戦ひを知らなかつた。只日本を清めて行つ

た。海と共に、河と共に、吹く風と共に。

冬の雲らは集つた。橋の雪、傘の雪、山の雪、野邊の雪らが降つてきた。冬の山山は眠つてゐた。冬の星らは冴えて行つた。川が涸れた。瀧が涸れた。凍鶴たちは苦しんだ。水鳥は晝も夜も眠つて行つた。芭蕉はかれた。蓮は枯れた。大陽たちは肥えて行つた。柊の花は眞白く咲いた。その花も亦散つて行つた。松柏たちは聳えてゐた。杉も檜も伸びて行つた。常緑の枝は雪を拂つて、直直の幹を突いて、冬も緑を消さなかつた。草木の種は盡きなかつた。雪割草が微笑んだ。寒菊たちが咲いてゐた。水仙もはや咲いてきた。草たちはみな下萌えた。日本の冬は短かかつた。草木はみんな榮えて行つた。

正氣は草木に萃つた。日本の草木に鐘つた。飢餓と疾病と暴逆の存する時も、正氣はやはり集つてきた。正氣は人にも連つた。その正氣を發した人間たちは、他に殺され、自ら亡くなり、窮死し、變死して行つた。その肉體はふみにじられた。その形骸は消え去つた。正氣はしかし還つて行つた。日本の草木にかへつて行つた。

正氣は清らかな國土を愛した。團結ある國民を愛した。正氣は草木を、もつとも愛した。國民の歴史と、國土の歴史の、草木の歴史と、國民の歴史の、一つに連るその國家の、草木を正氣は愛して行つた。日本の國民はその草木を愛し、かれらの神籬を高立てた。かれらは櫻を愛して發展した。かれらは菊を守つて變らなかつた。

ある歴史らは切斷され、汚辱され、魂たちはほり出された。草木は  
全て倒された。正氣はそこに安住せず、正氣は日本に集つた。國土と  
國民と草木の歴史は、ここではないつても一つとなつた。正氣はここに  
鐘つた。邪氣らを草木は清めて行つた。さまよふ世界の正氣たちは、  
日本めがけて集つた。正氣は不二にも連つた。日本刀にも凝つて行つ  
た。氤氳たる正氣は、寶祚無窮の神勅に應じて、萬世一系を護つてき  
た。剖判する正氣は、祭祀國基の神勅に答へて、その神籬を立てつづ  
けた。摩蕩する正氣は、神鏡授與の神勅を仰いで、外侮を斷じて却け  
た。精鍊する正氣は、齋庭之穂の神勅のままに、その生産を護つて行  
つた。

朝日の直刺す國として、夕日の日照る國として、六合は兼ねて都と  
なり、八紘は掩はれて宇となり、時は今まで流れてきた。神籬は高く  
伸びて行つた。

妖僧國を汚さんとする時、正氣は侃侃の神宣となつて、奸邪の冷肝  
を貫いて行つた。百萬の妖氛海に迫れば、正氣は神震皇怒となつて、  
風伯を驅使し波浪を躍らし、千艦萬船を粉碎した。逆賊、國是を亂さ  
うとする時、正氣は悄悄たる悲憤となつて、義膽忠魂は相競ひ、吉野  
の山に集つた。太平士道が鬱屈すれば、正氣は義士の劍となり、雪を  
飛ばして閃いた。櫻は谷に散りしいた。菊は氷の上に枯れて行つた。  
忠臣も義士もその血を稿らした。それでも櫻は咲きつづけた。菊の色

香は變らなかつた。松柏は緑を易へなかつた。

神籬は雲を破つて繁つて行つた。幕府も抑へることはできなかつた。金權も抑へることはできなかつた。國學と國史は勃興した。維新の正氣は爆發した。北方の熊も、迷へる龍も、正氣はみそいでうち拂つた。正氣は鐵槌となつて論議を碎いた。利劍に倚つて迷妄を破つた。團圓として世界を包んで行つた。落落として大空を貫いて行つた。正氣を發して志士達は倒れた。勇士の屍は草にむした。水に沈んだ。英靈らは復正氣となつて、草木の心へ還つて行つた。忍んで生きぬく者へ、苦しんで戦ふものへ、義のために苦しむ人へ、正氣は連つて還つて行つた。正氣の連るところに、各聞利達は無くなつた。落花

流水はただ茫茫と、霞の中に消へて行つた。

大野には颯颯として清風が吹いてゐた。光明は炎炎として長天に燃えて行つた。皇明は世界に満ちて來た。鴻鵠たちは翼をのべて、扶搖萬里の風に乗つた。草木はすべて、自然の色を増してきた。正氣は日本に鐘つてきた。

日本の人らは正氣を信じた。現實の破壊か、みづからの抹殺か、その選一の時がくれば、いつでもみづから亡した。かれらは來世や、天國や、この世ならぬあの世界へ、あこがれ、躍りこみ、信入して、自分一人の安心のために、亡びることはできなかつた。かれらは現世を

信じて逝つた。かれらは生命を信じて去つた。屍しかばねを醜惡と親切つてかくれた。草木の心を信じて死んだ。現世を信じて個人を棄てて、かれらは國土に生きて行つた。草木とともに生きて行つた。七度も八度も、よろず度も、生きかへり、生きぬくことを信じて行つた。一人一人の小さな死も、全體の大きな生へ、生きかへり、生きもどり、萬世不滅に生きることを、かれらはかたく信じてゐた。たとへ病に倒れても、たとへ職務に殉じても、たとへ戦ひに死ぬるときも、かれらはこの世に生きて行つた。わたしらは、楠かす氏の復活を今もみた。四十七義士が、今天騒げる姿を見た。乃木將軍が今も尙、號令するのを身に知つた。現實の國土の上に、彼らは正氣となつて生れ更り、活き還り、つねに日本に生きて行つた。孔子も釋迦も、ソクラテスも、クリストも

老子も、みんな日本に生きて行つた。日本にのみ生きて行つた。どこかでふわふわ迷つてゐる、幽靈たちは消えさつた。一葉の桐の葉が落ちてきても、そのとき木木は、勇ましい、冬の構へをはじめて行つた。一輪の白菊の花が凋しぼむときに、その根はすでに用意した。復來年の一輪を。毎日毎日、日本の人は死んで行つた。その度毎に赤子たちは、歎聲あげて生れてきた。

その日本は拜禮した。世界にも、東洋にも、日本はいつも拜禮した。日本は、世界の宗教に拜禮した。日本は、世界の文化に拜禮した。名君や、英邁な皇帝や、偉大な統領たちが、他の國にもあらはれた。それを彼らは繼つがなかつた。かれらは草木の心を知らなかつた。



かれらは拜禮することができなかつた。かれらは歴史を切斷した。主權はかれらの機械となつた。精巧優良の機械をのみ、彼らは買つて行つた。選んで行つた。かれらの手足は發達した。かれらの頭は飛躍した。かれらは腹を失つた。かれらは腰を忘れて行つた。かれらは草木をすてさつた。正氣はかれらを逃げ去つた。

日本は、自分の文化をもたなかつた。日本は何にも知つてゐなかつた。その無知の知を知つてゐた。草木の無知を知つてゐた。眞の道を行つた。周圍の力を抜き去つた。中心をのみ守つてきた。神なる詩をうたつてきた。蘭は支那からおくられた。ブラジルのはいもが植ゑられた。地中海の、アネモネたちが移された。英國のキユウさくら草が

花咲いた。北米の、かんざし花の苑もあつた。アフリカの、ひめぎり草も輝いた。歐洲の、宿根あまものびて行つた。コウカサスの針撫子も香つてゐた。南歐の、あらせいとうも、もたらされ、世界の花は、あふれても、櫻の匂ひは變らなかつた。松柏の色も變らなかつた。神籬は、天津磐盤に立つてゐた。苑はますます美はしく、正氣は日本に集つた。草木と共に鐘つた。

世界は統一されてゐる

世界は統一されてゐる。

大君の下に。

君は大聲あげて笑ふのか。……よし。笑へ、笑へ、笑へ。

その、現實を、知る者は、その眞實を、知るものは、草木の他には、無いのだから。

笑へ、笑へ、笑へ。そして、やがて、怒れ、怒れ、怒れ。

笑つても、怒つても、世界は統一されてゐる。統一されてゐないなら、どうして詩がうたへるのだ。

聴かう。砲煙彈雨の中で、轟き渡るあの詩を。爆弾も、銃劍も、滅ぼすことのできない詩を。草木の詩を。

あの詩のひびくかぎりは、世界は統一されてゐる。あの戦争は、内亂だ。この詩の、きこえぬ國は、ほろびるのだ。

聴かう。倒逆のない詩を。一系の歌を。血族の詩を。天の御中から大丈夫の血潮に、おらび降つたあの詩を。草木に通ずるあの詩を。

萬歳のうたを

萬歳のうたを、いつまで、かれらは、ためらふのか。戦場において、式場において、のみ、うたはれる、聲なのか。

喜びの聲、悲しみの聲、我執の叫び、無我のおらびの、一つにこもる萬歳のうたを、かれらも、やがて、うたふであらう。

機械によつて、叫ぶのは、蓄音器であらう。鞭によつて、吼えるのは、動物であらう。それゆゑ人類たちは、心の底から、この、萬歳を

うたふであらう。

それゆゑ、人類の中には、心の底では、うたへぬ者もあるであらう。

それでも、きつと、人類たちに、心の眞底まそこから、眞中まなかから、草木を抱く萬歳を、歌へる時が、來るであらう。

君は黙つて答へない

純潔、清淨、圓滿の朱。君は、皇國の旗を、誇るのか。

單純、簡明、その奇の無いのを、わらふのか。

淡白、澄明、君は櫻花を、喜ぶか。死を急ぎ、執着無きを、悲しむか。

身を清め、心のみそぐ、温泉を、君ははたして、賞でるのか。優柔、怠惰、だらしが無いと罵るか。

雲に輝く、秀峰富士を、君は、ほめるか、無視するか。

君は、黙つて、答へない。花を拵つて笑つてゐる。

死をみそぎたまふ

上つ瀬の瀬は速かつた。下つ瀬の瀬は弱かつた。命は中つ瀬におりかづき、御身を滌ぎみそがれた。

死に誘はれた身を清め、黄泉を求めた心を潔め、生命の玉を潔がれた。

神直毘の神は、命の御霊を直された。

大直毘の神は、命の御心を直された。

嚴之女の神は、命の御力を直された。

命は立たせたまひ、成りたまひ、流れ行く水をかぶりかぶり、汚垢をはらつてみそがれた。

水の底に、水の上に、わだつみの神は手をふり、足をふり、命の御身を清めて行つた。

命は息吹の詩をうたはれた。雄詰ぶうたをうたはれた。

八十禍津日神ははらはれた。

大禍津日神ははなたれた。

命はさけび、雄健び給ひ、中つ瀬の、流れは真澄んで音たてた。底つ瀬の真砂も清らに光つてきた。

晴れ齋く大空かけて、科戸の風が渡つてきた。死は今つひにみそが

れた。生はいまこそよみがへつた。

命は  
おらびたけびたまひ、建國の御詩をうたはれた。その大御詩の  
行く處に、八紘も六合も、空間も時間も、生生として統べられた。草  
と木は、その大御詩を覚えてゐた。一千年、二千年、二千六百年、永  
遠に、草木はなびきうなづいた。

う た ふ 神 神

大地はうたをうたつてゐた。

天の御中へうたつてゐた。天の御中からうたが降り、うたは雄健  
で生命をむすび、うたは神となり神産巢び、そのうたの姿はみえな  
つた。

大地は固らず、脂となり、大地はただよつて海日となり、みそらに  
濛氣がただよつた。

大地のうたは神となり、御空のうたは神となり、うたらは姿をみせなかつた。

大地は國となり、雲をうかべ、國も雲らもうたうたつた。そのうたらも、まだその姿をみせなかつた。

大地に泥が流れてきた。大地に砂がながれてきた。みんなはうたをうたつてきた。

うたは芽となり、土となり、美しの顔をあらはした。大地の顔はかしくんで、よろこびうたをはりあげた。

大地に人が生れてきた。人は男の神となり、人は女の神となり、國土の經營をしたまふた。

うたの御神はいつまでも、その雄ひびきをとめ給はず、男神女神に

矛をたまひ、國家のうたをねがはれた。

うたらは天の浮橋から、海の潮によびかけた。うたは矛からひびきおち、うたは矛からしたたりおち、うたは大地に反響し、國家のうたが湧いてきた。

男神は強くうたひたまひ、女神はやさしくうたひたまひ、うたは一つに生れてきた。

あなにやし、えをとめを。

あなにやし、えをとこを。

男神は女神をよびたまひ、女神は男神をよびたまひ、日本のうたがおこつてきた。うたは島となり、島らはうたひ、島らの數はましてきた。

島には力がみちてきた。島には石が生れ砂が生れ、直日の光りが輝いた。島には風がふきわたり、住みかふ家がましてきた。あらしはとりででふせがれた。

海は島らをとりにまいた。水は水戸にうずまいた。流れははやみ澄みわたり、小川は清みたばしつた。水沫はとびちりまたないだ。水沫はないでは輝いた。水の面はないで光つてきた。水の面に花がうつつてきた。

雨は天からふつてきた。國には溝がつくられた。田毎に水がみちびかれ、家毎に水がくまれてきた。

息吹は空の風となり、木木はみどりにしげつてきた。御山は高くそびえてきた。野原ははるかにひらけてきた。坂は野山につづいてき

た。霧は野山にさまよつた。谷は野山にひそんできた。崖が野山にかくれてきた。みんなはうたをうたつてきた。

船は海行く鳥となり、穀物たちは地にのびた。火は炎炎と燃えてきた。火は鑛石をうちとかし、埴土たちを焼きかため、不淨のものはみな流れて、野山の五穀をみのらした。みんなはうたをうたつてきた。みんなは食をよろこんだ。

人らは生れてまた死んだ。人らは悲しみまた生きた。死んでも生きてもみならずたつた。悲しみに、うたを忘れた人人は、雄詰あげて身をきよめ、雄たけぶうたに生きかへり、千人の人が亡くなれば、千五百の人が生れてきた。日本の人は生きてきた。皇國の人は増してきた。死への願ひがつよまつた。生への希ひが高まつた。死は生たちをき



よめて行き、生は死たちを尙きよめた。死ぬごとに、産れるごとに、生きる毎に、うたはますます高くなり、日本は大きくなつてきた。その神籬は伸びて行つた。

太陽と神籬

日の出るところはどこだらう。

日の出る國を見たいのだ。

始皇帝は海の東を、眺めてみた。海ははてなく廣かつた。太陽は、今日も海から生れてきた。

神人は、命を奉じて石橋を作つた。神人は怪力をふるつて石をはこんだ。石橋は、長く造られた。石橋は遠く伸びて行つた。

始皇帝は石橋の端に立つた。

太陽は笑つて海から登つて行つた。始皇帝は鞭を擧げた。神人の皮は裂けた。鮮血は肉から迸つた。石橋は眞赤になつた。

太陽はいつまでも上つて行つた。

そのころツングースの正統は、扁舟をおどらしながら、東に進んだ。東には一つの島があつた。その島の東に海があつた。彼らも太陽をつかまなかつた。太陽は遠くはるかに昇つて行つた。

かれらはもはや太陽を追はなかつた。太陽はもはや彼等のものとなつた。かれらは世界の神籬ひもろぎを立てて、双手を擧げて歡呼した。永遠の詩うたを合唱した。神籬ひもろぎを高く照らす太陽をうけて。草木を養ふ光りを望んで。

ま  
る  
い  
海

圓い海は

明<sup>あか</sup>く大きくなつて行つた。

あたらしい波は日本に寄せてきた。

太陽を産む朝は東に坐つてゐた。

死ぬことは

いつまでも黙つてゐることであつた。

還ることはいつでも嬉しかつた。

それは眞白な線となつて天につづいて行つた。

生きることは

彗星よりも速かつた。

一つの光りが空を裂いて走つた。

花の上まで落ちて行つた。

あ  
る  
夕  
べ

ある瀧の瀬がおちて行つた。

蟻が一匹流れて行つた。

木の葉を追つて沈んで行つた。

山の性はあくまで高く

私は大きな母を想つた。

墜落をさそふ肩を見た。

天胎をめぐる風を聴いた。

闇の中に水が光る

そよぐ音は山の葉であつた。

草の影はみなゆれてゐた。

息の聲はきこへなかつた。

肉體がどこまでもいつまでも

無くなつて行く時がつづいた。

血が土の底まで滴つて行つた。

流れるものはみな移つて行つた。

君は落ちて行く無法の勇者

脳髓を忘れた心臓となつた。

砕いた希望を地に植ゑた。

詩を空から書き下した。

影

は

石

詩は風。

私は冷い土であつた。

あなたの屍を埋めて行つた。

死は生きた

卵は割れた。

海が産んだ。

裂けた地の中へ種子を播いた。

残つてゐた

彼の息吹は空に消えた。

言葉もすべて忘れられた。

野菊の上に落ちた涙が乾いて行つた。



心臓の上へこぼれた一輪の花

それははや白い實をむすんだ。

からだは動かなくなつた。

人は石を置いては花を植ゑた。

お前が私を愛したのだ

だから私は生きたのだ。

お前の死は花木の親となり母となつた。

生命だんじょうはその弾條を知つて行つた。

焼かれてしまつた

足らぬ骨。

それを私は拾つて行つた。

花木の中に探して行つた。

寫眞はうそだ

それは嘘だ。

笑顔はその嘘をわらつてゐた。

それは私をあざむいた。

彼 笑 ひ 彼 晒 ふ

生きてゐる者らは知らなかつた。

かれらはいつてもよく嗤つた。

花は笑ふことができなかつた。

「すべては君が悪いのだ」

それは生きてゐる人らのいふ事だ。

知らない人らの吐く言葉だ。

象たちはかくれた湖へ沈んで行つた。

悲しみはみな喜びの子であつた

和らぎがぬれた天の中を上つて行く。

涙をわけてそれは青くなつた。

泣きつづけた眼らはみな星となつた。

今夜の月はゆがんでゐた

百合らはたがひに見合はした。

みんなは悲しみを知らなかつた。

蒼くなつた顔を知らなかつた。

君は死ぬ前も死を知らず

死ねば尙更死を知らなかつた。

只僕丈に知らしたのだ。

人間の死を知らしたのだ。草木の生を知らしたのだ。

少年はただ死ぬことをもとめたのだ

風はただ散らすことのみつとめたのだ。

ああ 私は、ただ産むことを求めたのだ。

生きることのみつとめたのだ。

嵐が刃に切られてゐる

秋は少年を誘つて行つた。

雲がその母をさまよはせた。

草はその父を埋めてしまつた。

生　　き　　る　　う　　た

死をうたふことはできなかつた。

死を語ることもできなかつた。

死を言ふときに、人はただ、

いつでも生を語つたのだ。

死といふ言葉の、そのすべてに、

人は必死に、生を觀た。

人間たちの、死のうたは、

終に言葉を失つた。

すべては生きるうたとなつた。

草木にいきる聲のみとなつた。

## 跋

「美はしの苑」の内には、亡き兒、弘示の精神とともに、先輩、知友、親戚の方方、三百五十餘名の、深い直接の愛情がこもつてゐる。ことにその構成推敲の精神は肥田先生および、詩友山之口氏に負ふところ多く、題名の選定には川内氏の親切がこもつてゐる。その他隠れた多くの人人の御援助に感謝する。またこの書とほとんど同時に、「思辨の苑」の著者、山之口彥氏の全詩作品集が、同じ山雅房から出版されたことは嬉しい。わたしは今は、すべての美はしいものの香りとひびきの、この世に一ぱいにみちることをのみ祈つてゐる。

山雅房 版權所有



美はしの苑 (奥付)  
山雅房版 綜合文化選書  
(注文番號1)

著者  
發行者

平田 內藏 吉  
川 內 敬 五  
東京市牛込區市ヶ谷田町三ノ二〇

昭和十五年十二月十五日初版印刷 定價一圓五十錢  
昭和十五年十二月二十日初版發行 外地定價金二圓二十錢

印刷所 東京市神田區神保町一ノ三三 同興舍

發行所 東京市牛込區市ヶ谷田町三ノ二〇

山雅房  
振替東京一二〇〇二五番



山雅房版

綜合文化選書刊行について

高邁なる詩精神、正純なる哲學精神、澁潮たる文學精神、およびそれらをつらぬく日本精神によつて、新らしく強い綜合文化の進展せんとする時にあたつて、小房は、文學、哲學、評論を中心とする、綜合文化の選書を刊行し、日本文化の新しい展開への、一聯の捧げ物としたいとぞんじます。これはさらに同じく小房の科學史、科學論等の叢書とも連なつて一層その綜合的な意味を高めて行くことを期してゐますが、廣く諸氏の御鞭撻と御協力、御援助をお願い申し上げます。

刊行者 識

山雅房版

綜合文化選書(刊行順序不同)

東洋の系圖 山本和夫  
現代日本詩史(現代詩學叢書の一) 高橋玄一郎  
美はしの苑 平田内藏吉  
新映畫論 北川冬彦  
文藝の日本的形成 矢崎  
世界論 金子鷹之助(外)  
現代詩論(現代詩學叢書の二) 加藤將之  
愚行集(支那・朝鮮・南洋の詩) 高橋新吉  
現代英佛詩史(現代詩學叢書の三) 三ツ村繁藏  
日本詩人論(現代詩學叢書の四) 大島博光(外)  
日本詩學(現代詩學叢書の五) 伊藤信吉(外)  
詩論 春山行夫  
現代ドイツ詩史(現代詩學叢書の六) 阪本越郎  
評論隨想集(題未定) 菱山修三  
明治大正昭和文學史 安積卯一郎

東洋論 山本和夫(外)  
現代詩人研究(現代詩學叢書の六) 三ツ村繁藏(外)  
日本歌學 加藤將之  
詩方法論(現代詩學叢書の七) 永田助太郎  
小説隨筆集(題未定) 丸山山薫  
現代詩人評論(現代詩學叢書の八) 山田岩三郎  
(無名集)(聖戰場)作用時間空間(英詩の諸相)(映畫論)(婚姻輪廻)(八木重吉集)(海外詩人評論)(阿Q正傳)其他續刊

山雅房刊

科學史叢書(刊行順序不同)

科學の始め 平田内藏吉  
近世科學史 原種行  
科學社會史 清水幾太郎(外)  
西洋醫學史 巴陵宜祐  
東洋醫學史 大塚敬祐  
日本技術史 清水清

山雅房版

詩華集(印交渉中)

現代詩人集(全六卷) 山之口・平田  
三十三名(外) 山之口・丸山  
三十三名(外) 野・永田・平田  
三十三名(外) 三ツ村(外) 編  
コギト詩集(コギト百詩集の叢書) 保田・田中・肥

生物學史 杉田元宜  
世界數學史 巴陵宜祐  
世界技術史 吉岡修一郎  
社會哲學史 矢崎  
精神學史 服部辨之助  
科學逸話史 加藤將史  
創造の偉人 吉岡修一郎  
(日本科學史。化學史。天文學史。軍事科學史。科學思想史。續刊。科學論叢書。續刊)

新流詩人集	四季詩集	四季詩集	四季詩集	四季詩集	四季詩集	四季詩集	四季詩集	四季詩集	四季詩集	四季詩集	四季詩集
學藝展覧會の特選詩集	四季詩集	四季詩集	四季詩集	四季詩集	四季詩集	四季詩集	四季詩集	四季詩集	四季詩集	四季詩集	四季詩集
山雅房編	丸山薫編	丸山薫編	丸山薫編	丸山薫編	丸山薫編	丸山薫編	丸山薫編	丸山薫編	丸山薫編	丸山薫編	丸山薫編
北川冬彦代集	金子光晴詩集	金子光晴詩集	金子光晴詩集	金子光晴詩集	金子光晴詩集	金子光晴詩集	金子光晴詩集	金子光晴詩集	金子光晴詩集	金子光晴詩集	金子光晴詩集
北川冬彦代集	金子光晴詩集	金子光晴詩集	金子光晴詩集	金子光晴詩集	金子光晴詩集	金子光晴詩集	金子光晴詩集	金子光晴詩集	金子光晴詩集	金子光晴詩集	金子光晴詩集
北川冬彦代集	金子光晴詩集	金子光晴詩集	金子光晴詩集	金子光晴詩集	金子光晴詩集	金子光晴詩集	金子光晴詩集	金子光晴詩集	金子光晴詩集	金子光晴詩集	金子光晴詩集
北川冬彦代集	金子光晴詩集	金子光晴詩集	金子光晴詩集	金子光晴詩集	金子光晴詩集	金子光晴詩集	金子光晴詩集	金子光晴詩集	金子光晴詩集	金子光晴詩集	金子光晴詩集
北川冬彦代集	金子光晴詩集	金子光晴詩集	金子光晴詩集	金子光晴詩集	金子光晴詩集	金子光晴詩集	金子光晴詩集	金子光晴詩集	金子光晴詩集	金子光晴詩集	金子光晴詩集

天國ビルの齋藤さん	北川冬彦代集	高橋新吉詩集	金子光晴詩集	山之口讓詩集	平田内蔵吉詩集	大君の詩	天の
山之口讓	北川冬彦	高橋新吉	金子光晴	山之口讓	平田内蔵吉	平田内蔵吉	平田内蔵吉
山之口讓	北川冬彦	高橋新吉	金子光晴	山之口讓	平田内蔵吉	平田内蔵吉	平田内蔵吉
山之口讓	北川冬彦	高橋新吉	金子光晴	山之口讓	平田内蔵吉	平田内蔵吉	平田内蔵吉
山之口讓	北川冬彦	高橋新吉	金子光晴	山之口讓	平田内蔵吉	平田内蔵吉	平田内蔵吉
山之口讓	北川冬彦	高橋新吉	金子光晴	山之口讓	平田内蔵吉	平田内蔵吉	平田内蔵吉
山之口讓	北川冬彦	高橋新吉	金子光晴	山之口讓	平田内蔵吉	平田内蔵吉	平田内蔵吉
山之口讓	北川冬彦	高橋新吉	金子光晴	山之口讓	平田内蔵吉	平田内蔵吉	平田内蔵吉

山雅房版  
平田内蔵吉著作集

坐の研	正の法	安の法	眞の法	殉の論	忠の序	和の研	體の究
坐の研	正の法	安の法	眞の法	殉の論	忠の序	和の研	體の究
坐の研	正の法	安の法	眞の法	殉の論	忠の序	和の研	體の究
坐の研	正の法	安の法	眞の法	殉の論	忠の序	和の研	體の究
坐の研	正の法	安の法	眞の法	殉の論	忠の序	和の研	體の究
坐の研	正の法	安の法	眞の法	殉の論	忠の序	和の研	體の究
坐の研	正の法	安の法	眞の法	殉の論	忠の序	和の研	體の究
坐の研	正の法	安の法	眞の法	殉の論	忠の序	和の研	體の究
坐の研	正の法	安の法	眞の法	殉の論	忠の序	和の研	體の究

限定詩書

高村光太郎詩集「道程」	三ツ村繁蔵編纂
新選萩原朔太郎詩集	山田岩三郎編選
マレー蘭印紀行	金子光晴

911  
29

山雅房

終